

林業家による教材研究—1枚の写真を通して

木の命に感謝する（上）

作成：波多野達二（はたの たつじ／林業家，元小学校教諭）

寸評：山下宏文（やました ひろぶみ／京都教育大学 教授）*

語り：「皆さん，これは，何をしているところかわかりますか。これは，樹齢400年，神社の杉の木を伐っているところなのです。近くに鳥居があったり，お社があったりするのです，そのまま伐り倒すわけにはいきません。大きなクレーンを2台用意して，1台で木を吊り上げ，もう1台のクレーンに職人さんが乗り込んで，チェーンソーで上から順番に伐っていくのです。えっ，木がかわいそうだって？ 本当にそうですねえ。何といっても樹齢400年の杉の大木です。関が原の戦いころから，ずっと生き続けて，この村を見守ってきたのです。けれど，この木は，これまで雷や台風の被害にあっていて，中心部分が，かなり腐っています。去年も台風の被害にあって，幹が折れて道路に倒れてきました。災害を引き起こさないうちに……ということ，やむなく伐ることになったのです。山仕事をする人は，こんな大きな木を伐るときは，必ず，木に御神酒を供えて，手を合わせ，山の神に木を伐らせてもらうことをお願いします。木と森の命に感謝するのです。悲しいことですが，どんな立派な木でも，いつか，必ず命の尽きる時があります。そして，もう一つ，山仕事をする人が必ずすることがあります。それは，木を伐った後に必ず新しい木を植えることです。新しい木の命が，また，そこに根付いていくのです。」



▲長い間，ありがとう

意図（波多野）：「これは，京都・北山・雲ヶ畑，厳島神社の樹齢約400年の杉の伐採の写真である。400年の長きにわたり，地域を見守ってくれた鎮守の森の大木なので，伐採するのは苦渋の決断だった。しかし，このままにすると，災害を引き起こしかねないので，やむなく伐採の決断をしたのである。この大木のように，木には必ず寿命がある。森を守ってきた人たちは，山の神に感謝し，木を伐らせてもらい，その後に，必ず木を植えるということ，掟として守ってきたのである。森を守り続けてきた先人たちの思いに，子どもたちが触れるきっかけになればと思う。」

寸評（山下）：作成者は小学校の教師の経験を持つ林業家である。だから，子どもたちに林業家の心を語ってもらうには，最適の人物である。林業に携わる人々の山仕事に対する想いや森を守り続けてきた先人の心を子どもたちに伝えたい。この教材は，社会科ばかりでなく，道徳や総合的な学習の時間など，さまざまな場面での活用が期待できる。

* 山下…〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1 Tel 075-644-8219（直通）